



赤崎の街並み —歴史と文化、自然—

本多 達郎

聞き手・今江つゆみ 山科佳奈子（石川県立志賀高等学校2年）

自己紹介

私の名前は、本多達郎です。昭和13年5月5日生まれ、平成26年で76歳になります。石川県志賀町赤崎に住んでいて、「富来観光ガイドの会・又次」の会長をしています。家族は私達夫婦ですが、違う場所に長男と娘夫婦と孫が1人います。

私は生まれてからこの赤崎の地で生活してきました。若い時は夫婦ともに教員をしていました。退職してからは、自然の眺めが清らかで美しく、昔から歴史のあるこの富来の地を多くの人々に知ってもらおうと「富来観光ガイドの会・又次」の会長をしています。

室町時代

ここはね、今では町の名前が志賀町になつとるけど、その中の富来でしょ、その富来の中の西浦地区というんです。

志賀町の一番北で隣が門前町、今は輪島市になつてますけども、その隣がここ西浦地区なんです。（注：平成17年に富来町と志賀町が合併し志賀町に、平成18年に輪島市と門前町が合併し輪島市となった）今は無くなつとる集落もあるけど、昔は深谷、前浜、それから笹波、鹿頭、小窪、赤崎という6つの集落があつたんです。赤崎と前浜は、西浦地区の中でも新しいんですよ。石灰岩などの水に溶けやすい岩石が、波に侵食されてできた地形になつとる関野鼻とか、観光で有名なヤセの断崖とかつて行つたことあるかな。赤崎の南の隣に千ノ浦という集落があつて、これも古い。それこそ縄文・弥生時代からの集落です。他にね、本なんかで調べると、西国の方から海女さんが赤崎へ流れ着いて、漁をしつたという記録も残つとる。海女さんは、舢倉島へ行つとるっていう記録もある。佐賀県と長崎県とかの海女さんがね、そういうところから来とるんやね。いろんな所から集まつてきた人達によって室町時代の終わり頃には、ここの赤崎の集落が出来ていったことは事実ですね。そして、段々人口が多くなつてきたんですね。室町時代からどこも集落が出来てきとるん

です。

赤崎も、はっきり分らんけども私の考えでは室町時代ぐらいに、ここに集落らしいものがあったんじゃないかなということです。伝説では室町時代に、富来の東増穂に飯室というところがあって、今は土地の名前だけが残って人が住んらんけど、飯室の人達が一村赤崎へ出てきたという話があるんです。飯室は田んぼが少ないので、日照りが続いたりすると作物が採れんで、そんな時に限って山の動物が降りてきて田んぼや畑を荒らす。今と一緒に段々そうなっていますけどね。タヌキとかムジナだけじゃなくて、イノシシとかシカとかが出てきて田んぼ荒らしたんだと思います。そこで田んぼを作っておれんということで、どっか良いところがないかみんなでも相談したところ、ここが空いとったということで人々は赤崎に住み着いたんです。小さい船持ってきたり、船小屋みたいなものを造ったり、田んぼでいうたら出作りみたいな感じで漁師の生活しとった。

出作り

出作りっていうのはね、ここに家があるのに他の土地へ行ってそこで作物を作って収穫したらそれを持って家へ帰ること。高浜（志賀町）でも若狭の高浜（福井県）から出漁に来とったんですよ。そして、秋になると帰ってんわ。高浜の川尻（志賀町）周辺には若狭から住みついた人がいた。

大念寺（志賀町）があるやろ。大念寺新町という名前でその人達が住む権利を貰ってね、それが段々大きくなって今の高浜の町になってった。そういうふうにして、赤崎も同じで、出張して出漁に来てたらしいです。飯室の人達はそれを聞いて、赤崎に住みついたら百姓で食べていかれんでも、ここの海岸で漁をして食べていけると分かったから赤崎に住みつき始めたんです。

ここは砂浜やけど、この横は岩場です。ちょっと浜へ出れば、魚も釣れたり、貝の種類もたくさんある。ツメとかシタダミとか食べたことあるかな。美味しいですよ。こういう貝とか海藻なんかを食べても生きていけたりするんですよ。それから、伝馬船で沖へ行くとね、浅瀬でドコバというのが赤崎の沖にあるんですね。ここの沖は、暖流も寒流も流れてきとるもんで、たくさんの魚が集まるんですよ。今でも、西海や西浦の漁業やとる人達は、赤崎沖のドコバへ行って、ハチメとか、ブリ、マグロ、回遊魚の青魚を捕るんです。クジラも来たりするもんで、ここは魚の宝庫やから食べる物には困らないんですよ。

下目板

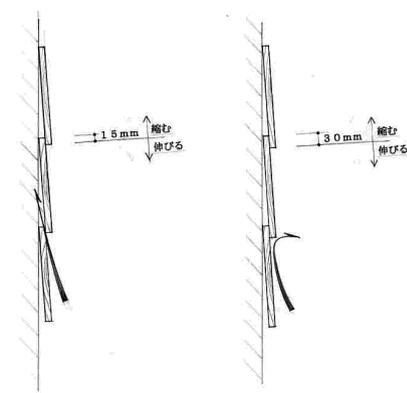
赤崎にある家の壁は昔から下目板なんですよ。白壁とかモルタルとかは駄目なんです。下目板っていうのはね、屋根に近づくにつれて板の形が少し細くなって板と板の間に



住宅のすぐ近くまで迫る海
(今、海岸は波返し、防波堤のテトラポット、離岸堤で3重に守られている。)



赤崎地区の多くの家の壁に見られる下目板



《参考 URL》夢工場 www.kanazawa-net.ne.jp/~yume/shitame.html

隙間が出来ないような形になっている板ねんわ。下目板の特徴は、夏になると風を通しやすくして、雨の日とか冬は板が水をたくさん含んで板同士がくっついて、風を通しにくくするっていう良いところがあるんです。特に、ここ赤崎の街並みはなんといっても海と家がすごい近いもんで、やっぱり潮風が強いんですわ。ほやから、風が強くて雨も横からや下から吹きつけるように降るわけよ。ほしたら、普通の板の合わせ方やと駄目なもんで、こういう三角形みたいな形になつとる。今は同じ厚さの板を2枚重ねてる家も多くなつたけどね。

潮風の影響

あんたらのところはどうか分かんけども、ここは家に潮風がバーンと当たるんやよ。ものすごい潮風がね。瓦の葺き替えは、あんたらち何年くらいでしとるかな。富来でも山の方はね瓦が50年くらいもつんですよ。普通、場所によっては30年から40年はもつところもあるんですよ。でもね、ここはね、15年か20年しかもたないですわ。今の瓦は釘で打ってます。ステンレスの釘でどんだけもつか分かんですけども、15年か20年で葺き替えせんならんすわね。それに、サッシの戸や戸車なんかでもすぐ錆びてしまうんです。

もう一つ、赤崎は潮風で木が駄目なんです。木が駄目なのに、木が生えとるじゃないかって思うかもしれんけど、これは決まった木なんです。庭にあるトベラとかね、モチの木、シャリンバイの木です。それから、ツバキの木とか。イチイの木もありますけども、そういうふうには葉っぱの厚い木しか育たないんです。非常に潮風で殺風景です。街並みを見て分かったように、こんな殺風景な家やけども、私はね、やっぱりここに住んどったら庭が欲しいなあーということで、庭を自分で造ったんです。あんたらのところに庭があって、その庭に生えとるカエデの木とか、それから紅葉する様な木ね、欲しくてもってきても、赤崎では潮風で枯れてしまうから駄目なんです。だから、一遍持ってきて植えとね、その年はまだ赤い葉っぱが出ますけども、次の年は枯れてしまつて駄目になってしまうんです。そこでどうしたかっていうたら、大小の石を配した石の庭にしたんですよ。私の家の庭は赤崎では特別広いんですけども、潮風でも大丈夫なように石の庭にしたんですよ。そして、木は潮風に強い木にしたんですよ。庭は志賀町の山岸造園に来てもらつてしたんです。庭にある2本のモチの木はね、私が生まれる前の大火の時に半分以上焼けたんです。だから黒くなつとるやろ。切つてしまおうと思つたら芽が生えてきて今はこんな大きくなつたんですよ。ここには昔納屋も蔵もあつたんですけど、私はやっぱり庭が欲しいということで庭を造つたんで

すよ。大体、庭は私が設計した。私の家のすぐ後ろに崖があるでしょ。庭の石はその崖から落ちてきた石を積んだものです。他にも前の庭にあつた石や、買つたり集めたりした石もある。この赤崎の殺風景の中に、やっぱり1軒でもこういうところが欲しいなあ、ということで庭を造つたんです。だからこの家の庭は他の家の庭よりも大きいんですよ。ほやけど、大抵皆庭を持つてるんですよ。入り口だけ見たら殺風景で、奥の方に庭があるっていう感じやろうけども、これも一つの抵抗です（笑）。

76年前の災害

赤崎の家で、古い家は何年もたつたかという、やっぱり100年以上もつとる家もありますよ。私の家の両隣の家なんかは建ててどれだけ経つたかという76年経つてます。76年経つとるっていうことは私が生まれた時からということです。この家は火事で焼けて、何年か後に建てたもんですから新しいんです。

赤崎は非常に土地が狭い。昭和13年5月に私は生まれたんやけど、3月に大火事があつたんです。赤崎の3分の1ぐらいが燃えてしまつたんです。その時にみんな、屑屋つちゅうか藁屋つちゅうか、瓦の家が1軒も無かつた。それから家が密集しとるもんですぐに燃えてしまつたんです。その後、ここの辺は瓦の立派な家がだんだん建つようになってきたと言われてますね。

戦争の後やけども赤崎は、漁もしとつたけども、海岸の集落やから田んぼとか畑が少ないんですよ。ほやから、初めは長男がここで百姓しとつたんやけども、次男、三男は日本水産とか大洋漁業とかの船員として海外へ出とつたんです。日水や大洋じゃなくても郵船とかタンカーとかね、そういうふうな船に乗つたんですよ。その後は、長男も嫁や子どもを残して、ここのほとんどがその船乗りになつたのです。まあ1軒の家に船乗りがおらん家つて少ないぐらいだつたんです。それがすごい景気がよくて、船乗りが儲かつたんですよ。特



本多邸の庭。背後に崖が迫る。



窓が少なく奥に長い立派な赤崎の街並み

に捕鯨船、大洋漁業かなんかの捕鯨船はものすごい儲かってね。そんなもんで、ここの人達は船乗りで非常な金儲けしたんです。金たくさん持っとるからここで家建てたいけど地面が少ない。地面が少ないけどもそこに家建てるっちゃうことになると思うって言うたら、その地面一杯に家建てたんですよ。ほやから、密集しとるんです。

家の前が、すぐ海になつとるもんで潮風が当たるから、納屋にしたり蔵にしたりするんです。そして、窓をつけないで本当の住宅は奥へ入つとるけども、まあどっちにしても、その狭い地面一杯にみんな家を建てたんです。それが今の赤崎の街並みなんです。

赤崎への思い

今では、船員が全然ダメでね。漁業だけで食べていけんげんわ。若いもんがおらんようになって、子どももおらんようになって、今は小中学生入れても5、6人しか赤崎地区全体でおらんがじゃないかな。昔は赤崎だけで、我々の同級生だけでも15人おったんです。今はね、赤崎の人口は250人ほどしかおりません。私が区長しとった時の最後（平成22年）が300人でした。戸数は120軒ほどあったんですけど、今じゃ114、5軒になつとるんじゃないかなと思います。数からいえば集落としては大きいけども年寄りばっかです。どこもそうになってきとるけども、まだ百姓しとるところは若いもんもおるけども、他は、おらんですね。隣の西海もね、漁でものすごい今盛んになつとるんですよ。漁ができて景気がいいみたいなんやけども、若いもんが漁業を継いだらんですよ。今は、都会からやって来て漁業やつとる。そんな時代になってきとるもんで、漁業はちょっと難しくなつてきていますけどね。

私はね、友達が船員で面白い話をするので、外国に憧れて

若い教員のときに外国へ行ってきたわけよ。一番初めはソビエト連邦共和国のねロシアの方へ行ってきた。中西陽一さんが知事の時に友人と一緒に行って来たんですけども、ヨーロッパも何カ国も行ってきたし、文科省の教育施設団としても2週間ほどで行って来た。ドイツとかフランス、ハンガリーも行ったし、それからオーストリアとかね。西ドイツ、アメリカ合衆国のハワイとかいろんなところ行ったんですよ。

そんなところへ行って帰ると、やっぱり赤崎はいいなっていう感じがする。やっぱり赤崎はいいなっていう感じがする。懐かしいちゅうか、生まれたところというかね。若いときには分からんのやけれども、だんだんこの良さがまた分かってくるね。向こうも綺麗な場所やら一杯あっていいんですよ。良いげんけども、帰つてくると「ああやっぱりここもいいな」ちゅうか、地元のことを分かってきますね。住んどるさかいここしか無いんちゃうかなって思いますしね。私はここで生まれてから仕方なしにここに住んでいますけども、皆もそうでないかね、自分の生まれたところに住んどるからね。

[取材日：平成26年8月8日・10月19日]

PROFILE

本多 達郎 ほんだ たつろう

昭和13年5月5日・76歳
「富来観光ガイドの会・又次」の会長

現在、志賀町赤崎に夫婦2人で住んでいる。他の場所に長男と娘夫婦と孫が1人いる。生まれてから赤崎の地で生活してきた。昔は夫婦ともに教員をしていた。退職してから、自然の眺めが清らかで美しく、歴史ある富来の地を多くの人々に知ってもらおうと「富来観光ガイドの会・又次」の会長をしている。





本多さん手作りの沢山のお面（左：入口）と蛙（右：玄関前）

● 取材を終えての感想 ●

私は「聞き書き」という言葉を聞くことも、実際に体験するのも初めてで不安と緊張ばかりでした。取材させていただいた本多さんご夫妻は実に優しく接してくれたので大変感謝しています。何を質問していいかわからずあたふたしている私たちに、「何でも聞きたいこと質問してくればいいからね。何かあるけ？」と、優しく言ってもらいました。また、写真を撮るために集落を歩いていると地域の方々が気軽に挨拶してくれたり、話しかけてくれました。赤崎の方々の優しさがとても感じられました。

赤崎の昔あった出来事や現在について本多さんの話を聞いて、初めて知ることがたくさんとても勉強になりました。今回の取材を通じて、能登の素晴らしさや、人々の温かさを知ることができました。このレポートを見て能登の存在を知り、たくさんの人に魅力的なところをもっと知って欲しいと思っています。

（今江つゆみ 写真：左）

私は書き起こしやレポート作りがこんなに大変なものだと「聞き書き」を体験してから気付きました。でも、同時にたくさんのお話を学ぶことができました。「聞き書き」研修会の合宿では、最初何をどうすればいいかわからず不安だったけど、それは自分だけではなく皆も同じだと知りました。この研修を通じて意見を発表することや人と接すること大切さを学びました。

赤崎地区を取材して、どの家も道路沿い、海岸に向かって同じような造りになっていることに気が付きました。私たちが道路から見る赤崎の街並みは、納屋や蔵だったのです。本多さんに赤崎を案内してもらおうと、私が住む高浜の街並みとは違い、どこか昔にタイムスリップした感じがしたのはこのためでした。納屋や蔵を前にして風除けとし、住宅は後ろに、しかも住宅の玄関は海岸に対してわざわざ真横に向けて造ってあります。「赤崎の冬は尋常ではない」とおっしゃった言葉の意味が良く分かりました。改めて赤崎の人々の知恵の深さに驚きました。本多邸では、入口から本多さん手作りのたくさんのお面や蛙の置物が私たちを出迎えてくれました。蛙は鳥獣戯画図を参考に作られたそうですがどれも人間味があり親しみを感じました。本多さんから赤崎の街並みについて丁寧に詳しく教えていただくにつけ、住んでいる人々がとても優しく良いところなんだと実感しました。

（山科佳奈子 写真：右）

